

(2018 年度派遣学生成果報告より抜粋)

<文系1年生>

派遣前の特別講義で台湾の人々を構成する4グループ、原住民、客家、閩南系、外省人の区別がなくなっていき、台湾人として一つの民族になっているという話を聞いたが、その通りであると感じた。台湾で3週間の生活を経験したが、その間にこれらの民族区分を目にしたたり目撃したりしたのは博物館や記念館の中での紹介くらいで、台湾の人々と交わる中でその分類の話が出たことはなかった。

またこの授業で1987年まで台湾では戒厳令の影響で生活しづらかったと学んだが、現在はそのような雰囲気は全く感じなかった。しかし、厳格であるべきところは厳格であり、例えば総督府には銃を持った警備員が常に外を見張っていた。また、中正記念堂や国立国父記念館では開館中は毎時間衛兵交代式が行われ、日本では見られない軍隊的な雰囲気を残しているところもあった。

派遣中の講義では台湾の法律について学んだ。日本の法制度についても熟知しているわけではないので内容は難しいものであったが、差はあれども日本と似通っているということが分かった。新聞などで台湾の情報を目にしたとき、理解するのに役立つ内容であると感じた。

三週間という短い期間であったので、中国語の語学力自体は渡航前と比べて大幅に向上したとは感じないが、確実に向上したと感じるのは、頻繁に使った単語の定着である。それは例えば挨拶といったごく基本的な単語であるが、どのような言葉を使うべきか考えてから発するのではなく、使うべき場面においてとっさに一言が発せられるようになった。また、滞在中に繰り返し繰り返し耳にした言葉についても、始めはわからなかったものが聞き取ることができるようになった。

留学前は聞き取りだけでなく自分からの発信も同程度にできなくてはならないと考えていたが、実際に会って話をする中で、会話においてまず必要なことは聞きとることであると強く感じた。現段階では自分の意見を伝える以前に、相手の言っていることがわからないと会話が成立しないからである。聞き取ることさえできれば、話すことができなくてもうなずいたり首を振ったり、あるいは肯定か否定だけで答えることができる。それでは会話の練習にはならないかもしれないが、相手とのコミュニケーションは最低限とることができる。コミュニケーションが取れなければ会話もできない。何かを買う時でも、こちらが主体となって発信することはほとんどなく、必要な情報を発するのは売る側である。何度も買い物をしているうちに、留学の後半では少しずつ相手の意図が理解できるようになってきたが、始めは全く分からなかった。留学前の勉強では聞き取れることを意識して勉強していったにもかかわらず、到着直後はほぼ理解できなかった。中国語話者の中で生活することはやはり重要であると改めて感じた。授業ではなく街で話される言葉については、ゆっくりと言い直してもらわなければまったく聞き取ることができなかった。何度か聞き返してやっと聞き取れて意味が分かるという状況であったので、一人だけと会話するのではなく様々な人の話す言葉を聞くことが重要であると感じた。特に難しいと感じたのは、相手が話していることが質問であるのかどうかということである。自分は質問されているのか、どのような質問をされているのか、どう返せばいいのか、そういったことを考えることが、難しかった。それに慣れるためには、もっと中国語話者との会話を増やさなければならない。

繁体字については最初の授業でこそ少し戸惑ったものの、すぐに慣れることができた。簡体字と日本の漢字を知っておけば教科書であれば読むことはできた。逆に、繁体字と日本の漢字を知っておけば簡

体字の読解もやりやすくなるのではないかと思う。会話に比べると、読み書きはやはりやりやすかった。書くことはあまり練習していないのでまだ難しいが、読みはある程度はこなせた。町にある看板なども、ある程度の長さが書かれていれば推察することはできた。しかし、時間をかけて一文字一文字をよく見て考えなければ意味を理解することはできなかつた。速読の練習をするつもりで台湾の新聞を読んでいたが、ただ文字を見ているだけで肝心の内容が頭に残っていないという部分が多く、速く読んで意味を理解するということはまだまだ難しい。

今回自分が配置されたクラスの教科書はピンインのない文章だった。ピンインを見ないで中国語の文を音読したことはほとんどしたことがなかつたので、始めはこれも戸惑ったが、回数を重ねるとすらすらとはいかないまでも一文くらいであればつまることなく読むことができるようになった。ピンインを使わないというのは中国語力を一段上げるために必要なものであると考えているので、これからもピンインに頼らないで読む練習をしていきたいと思う。

言語授業はほぼ教科書に沿って行われた。単語や文法の説明を中心に行われたが、日本語ではなく、英語もほとんど使われず、中国語のみで行われたことはやはり大きな進歩につながったと感じる。話されたことで聞き取れなかつた部分や理解できなかつた部分も多いが、理解しようと心がけて中国語にずっと耳を傾けていたことで、授業の中でよく使われる言葉を覚えることができた。内容は後になるほど難しくなっていたので留学の後半でも多くは理解できなかつたが、要所をつかむことはできるようになったと感じる。

中国語での会話が難しければ英語になる。これは大学の中に限ったことであるかと思えば、街へ出て同じであった。台湾の人々は総じて英語力が高いと感じた。そればかりでなく、例えば屋台などで買い物をするとき、こちらが日本人とわかれば日本語で話しかけてくるような人も多くいた。

留学前に考えていた以上に、台湾と日本の関係は深かつた。台湾で目にする言語は、中国語、英語に続き日本語が多かつた。パンフレットなどもその三言語のものが多く用意されており、予想以上に日本語が使用されていた。日本料理店も多く目にした。やはり日本のものでも有名なものは漫画やアニメが多かつた。日本語を勉強するきっかけも漫画やアニメに影響されて興味を持ったという人が多かつた。漫画やアニメに限らないが、現地のことを尋ねるときはまず自分の国について知っておかなければならないと感じた。

最も圧倒されたのは台湾の夜市である。大学周辺だけでも相当な数の夜市があり、どれも大規模であった。それが毎日行われているということに、驚かされた。大規模な夜市が各地で行われていて、毎日続いているということは、台湾の人々にとって夜市は生活の中に組み込まれているのであると感じた。その中で屋台を多く回ったが、メニューの漢字を見て理解できるものがほとんどなかつた。果物などならば推察できたが、台湾特有の食事などとなると見たこともない漢字が多く習った漢字や知っている漢字からでは考えることができず、食べ物に関しては普通の勉強とはまた別で覚えていかなければならないと感じた。

今回の留学では見聞したものすべてが学習になった。初めて台湾へ行って、現地の文化や生活に触れ、何より中国語話者の暮らす国で三週間を過ごした。初めての経験であるから得るものも非常に多かつた。次回以降の経験でも多くのものを得るためには会話をこなして文字が読める程度の中国語力を身に着ける必要がある。これからも一層学習に励んでいきたいと考えさせられる留学であった。

<文系1年生>

研修の中国語授業は月曜から金曜までの午前中で行われた。先生は台湾人の方であり、授業もすべて中国語で行われた。クラス分けにあたって最初の日にはレベルチェックテストが行われた。2人の先生を前に質問に答えていく形であったが、単純な「何が趣味か」「実家はどこか」といった質問の他に「なぜ」を深く問い詰めるような質問をされたのが印象的であった。なぜ台湾にきたのかという質問に対して「中国語を勉強したかったから」と答えたところ、「ではなぜ台湾なのか」と返されたことには非常に驚いた。一問一答で終わるのではなく、なぜそうなのかというところまで考える良い機会になった。

レベルチェックテストの結果、私はGクラスに配属された。Gクラスでは主にスピーキングが重視された。文法、単語もいくつか扱ったが、基本的に例文を何種類も読んだり、その文法事項を使った質問を生徒同士でしあったりと、とにかく中国語を口に出すと言うことに重きが置かれた授業内容であった。毎時間始めに先生が朝ご飯は何を食べたか、昨日は何をしたのか等の質問をみんなが聞いている状態で一人一人にしていったのが、自分にとっては最も効果的な練習になったと思う。全員で音読するときとは違って自分一人で文を考えなければならないので緊張感をもって臨むことができたし、そのときに言えるようにと普段から自分がしていることは、食べたものは中国語でなんというのか、というのを考えることができた。

次に校外授業についてである。私は校外授業として、台中フローラ博覧会、淡水、九份にいかせていただいた。フローラ博覧会では普段は故宮博物館にある白菜を見ることができた上に素晴らしい花の展示をみることができた。淡水、九份においてはそれぞれ観光地ならではの賑わった雰囲気や、その場所を有名たらしめる素晴らしい景色を見ることができた。校外授業では、普段は接することのほとんどない他クラスの日本人や、外国人の方々とも交流をもつことができた。またこの台湾研修のスタッフとなっているの方々とも校外学習の機会を通して交流を持つことができた。

次に文化授業についてである。私は文化授業として切り絵、茶芸、書法を選択した。日本で切り絵というと基本的には黒色のものを思い浮かべるが、台湾の伝統的な切り絵は縁起のいい赤で行われるということに驚いた。また図柄も、日本では切り絵は縁起物としての認識は薄く、花や人物といった特別な意味をもたないものが描かれている場合が多いが、今回つくった切り絵はどの図柄も「吉」という文字をデフォルメしたものであったり今年の干支であるイノシシであったりした。切り絵は一見どの国で行っても同じになるように思われるが、実際は台湾と日本では違うものなのだとすることがわかった。茶芸も同じである。同じ茶を扱うものでも、日本で茶と言えば抹茶、もしくは緑茶のことであるが、台湾の茶芸ではそうとは限らず烏龍茶でも行われるということに非常に驚いた。お茶の入れ方もゆっくりと進める点や、茶道具や敷物、添えてある小物等でも雰囲気を演出するという点では日本の茶道と似ていたが茶道具の種類やお茶のいれかたはどれも初めて見るものでとても勉強になった。書法においては、日本でも同じように漢字を扱うため目立った違いは見られなかったが、一つ印象的だったのは文字を絶対の一筆で書ききるのではなく、終筆を整えるために一度戻って書いたり筆を離した後でももう一度なぞるために書いたりしても良いという点だ。私は小さい頃書道を習っており、そのときには毛筆は絶対に一回で書き切って、後から細かいところに付け足したり二度書きしたりしてはいけないと教わっていたので非常に驚いた。日本との共通点も多いがこういった違いも見つけられ、全体を通して台湾の文化を知るとても良い経験になった。

次に交流会についてである。台湾師範大学に通う実際の大学生の方や他クラスの方と交流し、これまでどこに行ったか、これからどこに行きたいか等話を話して、おすすめを教えてもらったりもした。私は台湾の方に台湾におけるサブカルチャーについていくつか質問をしたが、台湾でも日本のアニメ、漫画、ゲームは人気であり、漫画は特にほとんどが日本のものを中国語訳したものであり台湾オリジナルのものは少ないと言うことを知ることができた。授業でやるような学問的な学び以外に、台湾で人気のユーチューバーや漫画、食べ物等台湾の世俗的な文化を知る良い機会になった。

最後に授業以外での台湾の体験についてである。最初の週は台湾についてはなにもわからなかったので、研修メンバーの友達の台湾人の方について行っているいろいろな場所へ連れて行っていただいたり会話したりしていた。ほとんどの方が台湾の大学生であったので、台湾の大学の様子も会話を通して多く理解することができた。また他にも、台湾に来る前から九州大学のランゲージテーブルで知り合っていた台湾の方と再会して観光地に連れて行ってもらうたりもした。九州大学で出会った当初は中国語はほとんど話せず英語で会話していたが、今回の研修を通してリスニング力、スピーキング力のどちらもおおいに鍛えていただいて、その方たちとほぼ中国語で会話できたことに感動を覚えた。会話パートナーとしても、友人が師範大学内でたまたま話しかけられた方とその後何回かお会いして中国語の練習に付き合っていた。教科書で習うような言葉以外にも、実際の台湾の方々が使うような日常的な表現をいくつか教えていただいて非常に勉強になった。自分たちだけでも何度か台北市内を観光したが、そのときにもお互いになるべく中国語で話すよう決めていたので、授業以外の日常生活のすべてにおいて中国語を学ぶ最高の機会になったといえると思う。

<文系1年生>

私は、今回この短期留学プログラムで非常に多くのことを学んだ。そのすべてを書き記すことができるかはわからないが、いくつかの面からこの留学の成果について振り返ってみたい。

まず、派遣前講義について振り返る。派遣前には、学習、文化、危機管理と、様々な面をカバーする講義を準備していただいておりますととても充実していた。学習面では、事前学習会で普段の中国語学習とは違う繁体字に始まる台湾の特色について解説していただいた。この時に教わったことが留学中の学習に大きく影響した。これは後程書いていきたい。次に文化、政治面の特別講義は、大変興味深いものであった。鄧麗君という台湾人歌手に注目した講義で、「歌」という文化面から政治、国を捉えるものだったためつい聞き入ってしまうような工夫がなされていたものであったように思う。この講義では、自国の価値観、先入観の存在についてはっと気づかされるようなものであり、これから海外で学びを深める、という状況の自分たちにとって非常に意味のあるものであった。事前学習の必要性を強く感じる事ができた。

次に学校での授業について振り返る。研修二日目に私たちはクラス分けテストを受けた。留学前に昨年度の研修生の先輩や、留学課の方から口頭のテストであることをうかがっていたので全く形式が読めないという不安要素がなくよかった。事前にいただいていた繁体字の予習プリントに目を通したり、仲間内で繁体字について勉強したりしていた。いざ試験本番。読むようにと指示が出された文章中には事前学習で知った単語が多くあり、おおむね発音することができた。質問にも積極的に発言することができ、とても楽しい口頭テストだった。わからなくても沈黙するのではなく、自分なりに返答しようと努められたのでよかった。次の日の発表で中級のクラスに入れていただけたことがわかった。少しレベルの高い授業に参加できるということでモチベーションもあがっていたのだが、いざ授業が始まってみると、

先生の話が速く、全くわからない、ついていけない、周りには自分より実力が上の人ばかり。正直最初は心が折れかけていた。そんな時支えてくれたのが同じクラスの友だちであった。少し自分のレベルより上のほうが絶対に成長できるよ、と励ましてくれたのだ。さらに、一日の終わりにみんなで談話室に集まり、各々その日の復習や、次の日の準備を行うようにしたので共に頑張ることができた。また、クラスの中には、全国から他の大学の方や、仕事をしながら語学学習を行っている方がいて、その方たちからお話を聞くことができたのが自分にとってとても良い刺激になった。まだまだ頑張れる、頑張りたい、中国語を自分のものにしたいと強く思うことができた。必死で先生の話に耳を傾け、毎日の授業を受けていると、二週間目にはいったくらいから少し自分の成長を感じることができた。具体的には、部屋の不具合で宿舎の方に修理をお願いする際に、中国語で受け答えをすることができ、耳が中国語に慣れてきていることを実感した。また、授業の合間の休み時間には、友だちと中国語で話すようにしていたのだが、最後のほうの授業で先生が、そのことについて触れてくださった。「中国語で話していたのを聞いていたのだけど、最初に比べて本当に上達した」と言っていた。その時の嬉しさはずっと忘れられないと思う。手ごたえを感じられることは非常にモチベーション向上に繋がった。三週間を終えるときには、「Hクラスで学ぶことができてよかった。この仲間と囲まれて、この先生の授業を受けることができて本当に良かった」と心から思った。

交流面でも申し分ない経験ができた。私は前期に Language-Table で仲良くなった台湾人の友だちが二人いた。その人たちにこの CLP の選考に応募すること、もし参加出来たらきっと再会しようということ伝えていたので、今回その約束を果たすことが叶った。前期に九大で話していた時にはほとんどの会話を、英語を使って行っていたのだが、台湾で再会したときには、大半の時間中国語を使って会話することができた。この時の喜びも言い表すことができないくらい達成感に満ちたものであった。確実に自分の中国語スキルは進歩しているのだと実感することができた。

また、私はこの台湾への留学中に台湾独自の「注音字母」を学んだ。これは先に述べた事前の学習会で「注音を学ぶと発音がきれいになる」と紹介していただいていたため興味があったからだ。近所に売ってあった幼児向けの注音学習帳を購入し、ひとつひとつその友だちに発音してもらって勉強した。この記号を用いると、たしかにアルファベット表記のピンインでは表せない音の違いに気づくことができ、非常に面白かった。友だちの細かい発音チェックのおかげで an と ang の区別はなんとか発音できるようになった気がする。とても楽しかった。言語を学ぶ楽しさを今まで以上に感じた。台湾でできた友だちとはみんな帰国後にも連絡を取り合っていて、次に会えるときにはさらに中国語スキルを向上させて、驚かせたいと切に思っているところである。

私がこのプログラムを志望した理由と、その目標は概ね達成できた。それ以上の学びも経験もあった。私は、今回の短期留学プログラムを通して自分の置かれている環境がいかに恵まれたものであるのかをまさに身をもって感じるすることができた。素晴らしい学習機会の提供と、支援をしていただき、共に言語学習に一心に取り組む仲間たちと囲まれて勉学に励むことができる。これ以上ない幸せだと本当に思った。この三週間で得たものはこれからの言語、専攻の学びに確かに生かすことができるだろう。今後はさらなる中国語スキル向上への取り組みと、言語に対する興味関心をもった研究に励んでいきたい。CLP-C で得た学習成果は必ず自分を成長させてくれると確信している。

<理系1年生>

「たった3週間の研修で、果たして何が得られるのか？」本 CLP-C 短期語学研修の為に台湾に向かう前、私はこの難題についてずっと考えてきた。3週間もの間海外に行くことは初めてだった私は、滞在中は嫌でも中国語のことをずっと考えないといけないので、ある程度漫然と過ごしていてもそれなりに自分が変われるのではないかという甘い期待があった。しかし台湾に3週間行くことが決定したことを周りの知り合いや先輩に報告しても、「たった三週間で中国語を身につけることなんてまず無理だけど」が接頭辞に付いてまわった。そのある意味当たり前の事実気付いてから、果たして本研修で何が得られるのか不安になったが、とりあえず出発までは、自分より中国語の授業を多く取っている他の九大生の前で恥ずかしくないように、教科書の内容を完璧にするように勉強を積んだ。

派遣前の特別講義では、鄧麗君(歌手のテレサ・テン)の歌をもとに台湾の歴史・民族構成を知るというものだった。日本人が作り上げたテレサテンのイメージと、実際の鄧麗君の姿の違いのように、日本人が作り上げた台湾のイメージと実際の台湾のイメージも乖離があることを講師は示唆していた。世界史を学んでいない自分は、台湾は中国のおまけの様な先入観もあったが、本講義のおかげで台湾の文化背景を深く知ることができた。この背景知識があるとなしとでは、現地で会った人との接し方等に明らかな差があったかもしれないし、知らなかったことを知れたことが単純に勉強になって嬉しかった。

私は事前準備として「中国語Ⅰ」「中国語Ⅱ」で用いた教科書の復習しかなかった。本に出てきた単語やスクリプトを再度復習し、これで多少は中国語も喋れるだろうという甘い期待のもと現地に行ったが、その期待は一瞬で打ち砕かれた。町中に溢れた繁体字の中で読める字は1割にも満たず、台湾人の早すぎる中国語は全く聞き取れなかった。「中国語実践」を受講していた周囲の友人にも語彙力で大きな差を感じ、初日や二日目は中国語を見聞きすることの恐怖症に陥っていた。しかし、そんな中でも私が常に心に決めていたのは、「中国語に拘る」ということである。店員さんや、師範大の学生さんとも英語なら一応コミュニケーションはとれたが、私はあくまで英語を「身を守るためのオプションツール」としての位置づけに留め、極力中国語しか使わないようにした。そして1日の間に出てきた単語はかならずメモして徹底的に覚え、語彙力の差を埋めるように努力した。

ここからは、私がどのような日常を現地で送っていたかを紹介する。授業はほぼ中国語で行われ、脳には相当な負担だったが難易度は丁度良く、相当リスニング力とコミュニケーション力がついた。そして、授業が終わった後は台湾人の人とできるだけ多くコミュニケーションをとって学んだ中国語を実践してみたかったので、外に出て行くことを意識した。ある日は公園のバスケットコートに出向き、台湾人の人とバスケットを楽しんだ。また別の日は温泉に赴き、ゆったりくつろぎながら台湾人の方々と会話を楽しんだ。また、師範大学の国際交流サークルの活動に参加して、一緒に春巻きを作るなどした。私は日本にいるとき、授業以外で中国語を使うことが皆無だったため、このような機会において、センテンスとして中国語が出てこなかったとしても台湾人の人と何とか意思疎通ができた時は非常に喜びを感じたし、日本に帰っても連絡を取り合えるような友人ができたことはかけがえのない財産になった。たくさんの経験を通して、最初はある程度怯えていた中国語にも帰国が近づくにつれてどんどん慣れていくのを感じた。知っている表現が増えていくたびに、レベルアップしたゲームのキャラクターのように自分が強くなっていくような感じがして喜びを覚えた。

また、滞在中には九州大学台湾同窓会による CLP 特別講義が開講された。陳先生より、台湾の法律の特徴について教わった。日本との法制度の比較を通して、逆に日本の法制度を知れたりして非常に勉強に

なったし、法曹の衣服の色の違いの説明や、日本人留学生の台湾での生活の紹介など親しみやすい内容も多く、飽きない充実の2時間だった。

ここで、最初の問いに戻ろうと思う。「たった3週間の研修で、果たして何が得られるのか？」もちろん中国語スキルに関しては飛躍的に向上した実感はあるが、たった3週間でペラペラになるということはやはり厳しい。私が語学以上に本研修で得られたと思うことは、「柔軟な思考」である。日本にいるとき、団体観光客が周りを気にせず大声で喋っているのを聞くと大体中国語だった。学校でも、台湾は日本よりも発展途上の国として教えられていたので、私は台湾に対して必ずしも良い印象だけを持っていたという訳では無かった。しかし、台湾では接する人は誰もが優しく、落とされた財布は発見され、道行く人にノリで話しかけても笑いながら応じてくれた。「台湾人はどんな人」と、国対国で人を判断するには対象が大きすぎる。本研修は沢山の先入観を壊してもらえ、言わば「自分壊しの旅」であった。また、当たり前前のことではあるが台湾に行けば、自分は外国から来た留学生としてホストして貰えた。九大のサークルで頻繁に留学生と接している自分は、これはとても不思議な感覚であった。国際交流サークルでも交流会でも現地の学生と休日に会ったときも、師範大の台湾人学生は基本的に英語ではなくあえて中国語で話しかけてくれた。自分が中国語を勉強しに来ていることへの思いやりである。九大では、留学生がいたら反射的に英語で話しかけてしまう自分がいたので、柔軟な思考をもって相手のことを思いやり、日本語で話しかけていこうと思った。

本研修は自分にとって、大いに意義のあるものとなったし、もっと中国語を上達させて長期留学にも行ってみたいと思うようにもなった。この経験を今後に活かしていきたい。

<理系1年生>

この三週間の中国語研修を終えた今、台湾に三週間滞在するという貴重な体験を通して、大きく成長できた実感している。このプログラムに参加しようと思ったきっかけは、ずばり将来につなげるためである。大学に入学して中国語を学び始めた私だが、アルバイト先のホテルで中国や台湾からいらっしゃった観光客の方々と拙い中国語で交流していくうちに、中国語がどんどん好きになった。その一方で、中国語は話せるが、日本語、英語は話せないという方が多いことに気づいた。きちんと中国語で対応できない度に、もし同じ状況が将来医師になった自分に降りかかったらどうなるのだろうと考えた。言語の壁のせいで最良の医療を提供できなかつたり、人の命を救えなくなつたりする可能性もあるなどハッとした。中国語が母語の患者さんに、細かなニュアンスも含めて医師が直接コミュニケーションを図っていく意義があると実感した私は、ますます中国語の勉強に力を入れていった。中国語の発音そのものが好きだったのと、新しく学び始めた言語ほど、最初のほうになるべく正しい発音を身に着けることが大切だと考えていた私は、授業の後に先生と一対一で発音の練習をしてもらった。勉強を進めるモチベーションにするためにも、6月、11月にはそれぞれ中国語検定4級、3級にチャレンジし、合格することができた。また、12月の江蘇杯スピーチコンテストに出場したときは、優秀賞をとることができた。

そして、この春休みの中国語研修を迎えた。しかし、初日の面接を終えて割り振られたクラスで、私の中国語への自信は一瞬でなくなり、焦りが生まれた。なぜなら、先生は授業中すべて中国語を話していて、私は先生の話の2割ほどしかわからなかったからだ。さらに、周りのクラスメートのレベルが高く、質問があれば中国語で積極的に先生に質問していた。皆の中国語への真剣さが伝わってきて、おいていかれたくないと強く思った。しかし、わからない時は英語や日本語を使えるからいいや、という妥協が効

かななかった環境はかえって最高だった。授業を受けていくうちに、先生の使う中国語のパターンを吸収できた。「だよね？」という意味の「對不對」、「例えば…」という意味の「比方說」、「…ページをひらいて」という意味の「打開…頁」などが授業の流れをくむ手掛かりとなった。授業は、学習する課の新出単語を一通り学習し、本文を音読した後、毎日違うパートナーとその本文についての質問を出し合い、答えるというスタイルだった。最初のほうは、知らない単語や表現を吸収しようと一生懸命になっていたが、第二週に入ったころ、むしろ習ったことの定着がたりていないことに気づいた。本文にはピンインはおろか、声調もかかれておらず、あるのは繁体字のみであった。これを音読するとなると、知っているはずの単語の声調を間違えずに読んだり、すべてをよどみなく音読したりすることがいかに難しく、一方でいかに意思疎通には欠かせないポイントであるかが分かった。そこからは、しっかりと基礎から定着させていこうと考え、本文すべてに声調を書き込み、音読するときは指で声調を表しながら読んだ。授業外で中国語を話すときは、もし間違った声調で話したら、続けて正しい声調を繰り返して言うようにしていた。また、ネイティブスピーカーの中国語をまねるのが一番だと思い、授業中に先生の言葉をロパクでシャドーイングしていた。それを続けていった結果、授業中の先生の話は7割、8割理解できるようになった。

授業の中国語は聞き取れるようになっていった一方で、いったん街に出たり、台湾人の友達と遊んだりすると、一気に聞き取れる量は減った。しかし、授業外の中国語もまずはパターンから学習した。例えば、お店に行くと、「どのメニューにしますか？」という意味の「你需要什麼菜？」や「これで以上ですか？」という「這樣就好嗎？」など、聞かれるパターンがあるものである。途中で外国人と気づかれて英語の接客に切り替わってしまったときもあったが、それはまだ自分の中国語を伸ばす余地があるというモチベーションにつなげていった。また、台湾人の友達も、遊び半分でお店に来たシチュエーションを想定して一緒に練習してくれた。それだけでなく、台湾人の友達からは、「おつかれさま」、「やばい」、「モチモチ」といった、学校で習わないような言葉や語気助詞を教えてもらった。

以上、学習面を述べてきたが、生活面や文化授業を振り返っていきたい。文化授業では、切り絵・茶芸・台湾語を選択した。茶芸はまずその道具の多さにびっくりした。飲むための器だけでなく、においをかぐ用の器もあったことが印象的だった。さらに、日本では特に最初に淹れたお茶を捨てることはしないが、台湾の茶芸では捨てる。これは、近い国同士なのに、同じお茶を飲むという作法が違って、お互いの正解が違うことが面白かった。

次に、台湾語である。留学する前は台湾語について詳しく知らなかったが、台湾の友達曰く、40歳以上の台湾人は95パーセント台湾語をしゃべることができ、学校で台湾語を習うことはない今でも、教育の一環として台湾語を子供に教える家庭もあるのだそうだ。声調が普通語と違って7つあり、それぞれの声調をつかむのはとても難しかったが、先生がフレーズをリズムよく教えてくれたので楽しく学べた。リズムよく繰り返し口にする勉強法は、普通語の勉強にも生かせると思う。

また、派遣前の特別講義では、テレサテンの音楽にのせて、台湾と中国大陸のつながりや、当時台湾を植民地としていた日本との政治的な関係などを学べた。実際に、台湾で三週間生活すると、日本語が話せる人や、日本が建てた中華民国総統府や学校の校舎、街中でよく見かけるひらがなの「の」など、日本と台湾のつながりも実感することができた。研修中に行われた九州大学台湾同窓会が企画してくださった特別講義では、台湾の法律の仕組みと台湾での留学について学べた。台湾は交通費や食費も安く、台湾で留学することの魅力にひきつけられた。そして、特に印象的だったのは、講師の陳先生が流暢な日本語で

すべて講義してくださり、最後に「特にネイティブスピーカーの前で日本語を話すのは、少し恥ずかしいし緊張するけど、これは乗り越えなければならない壁」だとおっしゃっていたことだった。

この留学を通してさまざまな経験を積めたが、その経験をこれからも活かし続けることが大切だ。特に、今回の留学の収穫は新しい課題を見つけられたことだ。中国語の検定では、読む、書く、リスニングの力がはかれるが、現地の生活ではこれは何の意味もなさないと気づいた。検定のリスニングは現地の人が話す中国語に比べると遅すぎる上に、特に話す能力は検定では測れないからだ。聞き取れるようになり、さらにそれを理解して中国語ですぐに返答できるようになるにはまだ実践が必要だ。現地でも中国語を使って会話をした九大の留学仲間、台湾の友達との出会いを大事にして、これからも中国語の勉強を続けていく。そして、また新しい台湾人、中国人の友達と出会っていくのも楽しみだ。